

## 【優秀賞】

## 旗竿の騎士、ギョーム・ド・レエの手記

磯瑞樹（鹿児島県 ラ・サール高等学校 1年生）

## 冒頭

私、ギョーム・ド・レエは人生の最後に聖地へ巡礼に向かったこの二年の旅路についてこの手稿を遺そうと思う。

その目的は、私が主に誓った、ド・レエの家の者はサラセン人に教えの違いから刃を向けずキリスト者と彼らの懸け橋となるべし、という誓いを子々孫々に至るまで忘れさせぬためである。

私はこれまで、我々の聖地を占拠しているサラセン人どもに対し、キリスト教徒として一般的な義憤を抱いていた。

もし、私がこの旅の前にウルバン二世陛下の唱えられた十字軍遠征について聞いていたなら、狂わんばかりに喜び激しく燃える正義の怒りを胸にこの老いた体にムチ打ちはせ参じただろう。

だが、今私はサラセン人を同じ大地に住む同胞であり愛すべき隣人だと思っている。

さして多くもない路銀が不足し、聖地を前に飢え死にしようとしていた私に救いの手を差し伸べたのは、サラセン人の隊商だったのだから。

## 一

故郷のノルマンディーの地を離れ、陸路で聖地へと向かった私は、キリスト教国を通るうちは、つまり東方はビザンティン帝国を抜けるまでは、路銀の心配をする必要はなかった。

善良なるキリスト教徒ならば、巡礼者である私に快く一晚の寝床と食事を提供してくれるからだ。

しかし、サラセン人どもの土地に入ればそうは言っていられなくなってしまう。聖書の教えを敬わぬ彼らは、巡礼者である私を何を求めるにも金を要求するからだ。これは完全に想定外であった。だが、主の教えに従わぬ彼らに隣人愛の心を求めるのは酷なことだろうと私は思った。

主の教えに従わぬものばかりの地を進み、不気味さと恐ろしさを感じていた私は、彼らがアンテيوخアと呼ぶ街に着いた。このいくつもの城塔と堅牢な城壁を持つ都は、のちに偉大なる将、ロレーヌ公ゴドフロア・ド・ブイヨンやトゥールーズ伯レーモン・ド・サン・ジルに率いられた騎士たちが、総督のシヤンという者から激しい戦のちに手にすることとなった。

東方の物産は西方よりはるかに豊かで豪奢である。ビザンティウムでも感じたが、この町でもそれは大いに感じられた。豊かなのはよいことだが、サラセン人どもを平らげた後にこれがキリスト教徒の間で禍根にならないかどうかその時は不安になった。

私はアンテيوخアを出て川に沿って進みハレンクと呼ばれる街についたところで路銀の大半を失ってしまった。

しかし、主のご加護があると信じ私は進んだ。

私はシャイザールという町に着くまでに路銀をすべてなくし立

ち往生してしまった。聖地まではいまだはるかな道なのである。ティロス、アツコン、ハイファ、カエサリア、アルスーフ、ヤツファ、多くの町がこの先にあり、果ての見えぬ砂漠を越えなければならぬ。

そのような状況の中で私に出来たのは主に祈ること唯一つだった。毎日聖書の一節を唱え、主に祈りながら砂漠の中を歩み続けた。

しかし、救いの手は差し伸べられず、水の尽きた私は三日と経たぬうちに命を落とそうとしていた。

主よ、我をお見捨てになるか。

絶望の叫びとともに意識を失った私が目覚めたのは、隊商の野営用天幕の中のことだった。

二

私を救った隊商のリーダーはアブドゥルというサラセン人の若者だった。彼は聡明な美丈夫で、サラセンの言葉を話せない私と故郷フランスの言葉で会話してくれた。さらに慈悲深いことに、彼から見て異教徒である私に、手厚い介護を施してくれたのだ。

サラセン人など所詮は下等な蛮族と思っていた私はこの時、感謝よりも嫌悪感と疑念が先立っていた。

「やいサラセン人、なぜ私を助けた？ 貴様にくれてやるものなどありはしないぞ！」

私が叫ぶと、彼は困ったように苦笑しながら、行き倒れているものを救うのに、サラセン人もフランク人もありません、と答え

た。彼の隊商はアスカロンをひいてはカイロを目指しているよう

だった。また聞くとこのころによれば、イエルサレム、我らが聖地は彼らにとっても聖地であり、この隊商もアスカロンに行く途中で巡礼する予定だった。

私はその時、サラセン人の、異教徒の手を借りて巡礼するなど家名を汚す行為だと思い、すぐに隊商を離れようと考えていたが、アブドゥルに

「あなた一人ではどのようにしてイエルサレムまで行くのです？

西方の緑豊かな、穏やかな土地と、この東方の砂漠とは、全く異なる掟のもとに行かねばならないのです。それに、救われた恩も返さずに手前勝手に立ち去るとは、フランク人とはこうも恩知らずな人々なのですか？」

と言われては去るに去れず、結局私は不承不承ながらも彼の隊商と共に聖地を目指すこととなった。

隊商の生活は、これまでの一人旅とは大きく違っていた。

共に行く以上、彼らと共に何らかの仕事をしなければならぬ。隊商は出来る限りオアシスを伝って進む。そしてオアシスにつけば、大きな駱駝の胃袋を何袋も水で満たす。砂漠において水を失うことは死に直結するからだ。

故郷のノルマンディーでは、森に入れば泉があり、川も流れており、旅の中で水に困ることはほとんどなかった。私も大した量の水を持たずに砂漠に踏み込み、時折見られる人の物とも獣の物ともわからぬ白骨の一つになるところだった。

水汲み以外にも、駱駝に乗せた荷物の積み替えや、野営地の設営など、男手の要る仕事は多い。どちらも、多くの荷物を決して多くはない人数で動かさねばならないので私の存在はありがたかったようだ。

私も若かりし頃は、一人前の騎士として戦働きをしていた。ギョーム陛下の下でヘースティングスに輝かしい勝利を得た頃、同朋の騎士たちと名譽をかけて決闘に励んだ頃は比べ物にならないが、それでも腕は力強く、足腰は頑丈だった。

こうして、私たちは互いに協力しながら、彼らは最終的にはアスカロンを、私は聖地を目指した。

また、そうした仕事とは別に、彼は多くのことを私に語り、私もまた多くのことを彼に語った。

アブドゥルの話は、私のこれまでの常識を粉々にするようなものばかりだった。

世界の東の果ては聖地とその東のエデンの園ではなく、アレクサンダー大王の支配の及ぶそのさらに東まで続いていること。

アラムートには、サラセン人の神アッラーのために、自らの教義のために、許されぬことはいないと嘯く恐るべき暗殺教団が巣食っていること。

聖地のそのさらに東の国は、一人の皇帝によって全キリスト教世界ほどもある広大な国が統治されたこともあったこと。

彼の地には小さな火を点けると忽ちに雷を放つ黒い砂があること。

その国でさえ世の果てではなく、海を渡れば多くの黄金を産む島国があること。

どれも私が想像だにできなかったことだった。或いは世界は主の教えのないところの方が多いのかもしれない、その気づきは、恐ろしさとともに、現役を退いて以来忘れていた興奮を私に感じさせた。

アブドゥルに出会ったのが三〇年早かったなら、私は彼と共に世界を巡ることが出来たかも知れない、今はそう思われる。

私も、彼に西方で私が見たもの、経験したものを語った。勇猛なるギョーム陛下に従い、世界で最も洗練された船であるロングシップに乗り故郷ノルマンディーを出たこと。

ヘースティングスの丘でハロルドとその配下のアングロ・サクソン人を相手に激戦を繰り広げたこと。

我々の用いたクロスボウの威力について話したときは、さしもの彼も感心していた様子だった。連射力には劣るが強力な矢を放て、素人でも扱いやすいクロスボウは偉大な武器である。

ノルマンディーを出た後はイングランドの領地を治めることに専念しており、文盲でないだけかもしれませんが学のない私の話に、聞き上手でもあった彼は真摯に耳を傾けてくれた。

サラセン人に対する嫌悪感アッコンに着く前には消え去っていた。

そこにはアッコンの直前であった大事件も関係している。それについても語らねばなるまい。

### 三

隊商の平穏が崩れ去ったのは、アッコンに着く二日前のことだった。

盗賊の襲撃を受けたのだ。

盗賊が現れたのは、アッコンに着く少し前のワジに沿って進んでいる時だった。

反対側の土手の陰から十騎ほどが、後方から十五騎ほどが現れ、軽快な動きで取り囲んできた。

アブドゥルは角笛を鳴らし隊商の護衛たちに臨戦態勢を取らせた。彼らは素早く隊商の周りに集まると、短弓を賊どもに盛んに

射かけた。

私は彼らの弓の小ささにあきれ果てたが、驚くべきはその威力、サラセンの短弓はクロスボウにこそ劣るが十分に鎧を貫く力を持っていた。

賊は数に任せ矢の雨を降らしこちらの動きを封じてくる。そして彼らは間合いを詰めると、こちらの護衛一人一人を狙い撃ってきた。

だがアブドゥルは冷静だった。隊商を近くの丘の上に逃がすや斜面に天幕の柱を打ちつけさせ、その陰から矢を射かけさせたのだ。

矢を上に向けて放てば狙いを付けづらくなる上に威力もそれが、頭の上を盾で守れば一気に安全になる。

さらに、天幕の柱を敵に向けて固定することで、馬を阻む障害にもなった。馬が立ち止まればたちどころに射殺され、無理に突っ込んで馬が串刺しにされて止まってしまう恐ろしい策だ。

ハロルドがヘースティングスの丘で我々を苦戦させたやり方の進化させたものだった。

さらに、彼自身の武勇も優れていた。仲間の屍を超えて囲みを破った賊を瞬く間に二騎、右手の湾刀で切り倒したのだった。

名譽のため私もまた三人の賊を旗竿で打倒したことを言い添えておく。

この戦いを通じて、私はアブドゥルを優れた戦士だと認めるようになり、戦友愛のようなものさえも感じるようになった。そして、この戦いに倒れた隊商の仲間の死を、心の底から悼むことが出来たのだった。

四

盗賊との戦いから二か月、我々は遂に聖地にたどり着いた。

聖地イエルサレムは、堅固な城壁に囲われた石造りの荘厳な街だ。今はサラセン人たちが治めており、街並みは彼らの様式であった。

私は、アブドゥルたちと別れ聖墳墓教会を目指した。彼らは彼らの聖地、岩のドームに礼拝に行った。サラセン人も我等キリスト者も、考えることは同じということだ。二か月前ならば嫌悪感しか覚えなかった事実を、今は喜びと共感を持って受け入れられる。我ながら驚くべき変化だ。

聖墳墓教会は決して大きなものではない。聞くところによれば、かつてサラセン人の狂信者の王が兵に命じて打ち壊したが、のちにビザンティン帝国の皇帝により建て直されたのだという。

その決して大きくも豪華でもない教会を前に、私は感動に打ち震えた。入り口を潜り、中のドームにある石墓の前に跪く。そして、聖書の一節を唱え、主を賛美する私の心は感謝と歓喜に満たされていた。

嗚呼主よ、私をこの地にお導きくださったこと、これまで辛いなる人生を歩ませてくださったこと、感謝してもしきれません。彼のサラセン人たちも、主の思召し召しで私の前に現れたのでしょうか。

私は今、イエス様に最も近いところにいる。ここが全キリスト教世界の憧れの地であるのもむべなるかな。

願わくは全てのキリスト者がこの地に巡礼できる日が訪れますように。

私はこうして聖地巡礼という人生の悲願を果たし感無量の思いで聖墳墓教会を離れた。

見ると、聖墳墓教会に入った時は昇り始めたばかりだった太陽は、今や我が故郷の方に沈もうとしていた。

そして、驚くべきことに、教会の前の広場の隅からこちらを窺っていたのはアブドゥルたち隊商の仲間だった。

私が彼らのもとに行くと、彼らは笑顔で迎えてくれた。彼らも満足のいく巡礼が出来たのだろう。

「なぜここに？」

私が問うと、アブドゥルは笑って答えた。

「仲間の巡礼が終わるのを待っていたんです。あなたは実に信心深い方だ、崇める神は違えど、尊敬します。」

私は、アブドゥルだけでなく、隊商の皆が私の為にごここまでしてくれたことに驚いた。

「しかし、私とはここでお別れのはず。あなた方が待つ必要はないでしょう。」

「それについてひとつ相談なんですがね、ギョームさん。我々の向うアスカロンは海港都市です。そこに行けばジェノヴァやヴェネチアの船に乗れるでしょう。我々はこのまま南下しエジプトまで向うので、貴方の帰路には一緒できません。ですが、アスカロンまで一緒に行けば貴方は船で故郷に向えます。路銀は出しますので、安全な帰路でお帰りください。家族が巡礼行の話を聞きたがっているはずですよ。」

彼の提案はとてもありがたいものだった。しかし、彼に路銀の世話までしてもらっては、騎士の名が廃る、そう思つて拒絶したが、彼は頑として譲らなかつた。

「ジェノヴァやヴェネチアの連中は、他の純朴なフランク人とはかなり違う奴等です。金に結びつかないことはしないでしよう。どうか貴方の助けになることをさせてほしい。仲間からの助

けを受け取れないほどフランク人はメンツにこだわる人々なのですか？」

またこの論法だ。私たちはおかしくなつてとうとう二人して笑い始めた。

私はついに彼の申し出を受け入れ、アスカロンからジェノヴァの船で故郷を目指すことになった。

#### 最後に

思えば、アブドゥルたちとの旅は、決して長いものではなかつたが、実に愉快な日々であり私の生涯の宝とすべきものだ。

この時、私は主の一つの誓いを立てた。

『わが子々孫々に至るまで、ド・レエの家の者は、教えの違いからサラセン人に怒らず憎まず刃を向けず、彼らとキリスト者の懸け橋たることを誓う。』

これを聞いた時、アブドゥルは嬉しそうに笑い、その誓いがあなたの子孫をサラセン人の友とするでしょう。それが彼らを幸せへと導きますように、と祈つてくれた。

どうかこれを読む者よ、友愛の門を信条や宗教を理由に閉ざさないでほしい。真の友愛は信条や宗教の違いを超えた先にあるのだから。

ギョーム・ド・レエ